



TITLE:

資料8 ニホンザルの保全に関する研究(V 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

和田, 一雄

CITATION:

和田, 一雄. 資料8 ニホンザルの保全に関する研究(V 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2000, 30: 133-133

ISSUE DATE:

2000-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165332>

RIGHT:

資料 8

ニホンザルの保全に関する研究

和田一雄（野生生物保護学会）

京大盛長研ニホンザル野外研究施設に蓄積されている各地の調査報告書の中から、青森県関係分を参考にして白神山地の猿害に関する現地調査を行った。

1970年代に白神山地の青森県西目屋村では猿害は知られていなかった。それが、1980年代後半になって村の上流側の田圃の稲やリンゴ園で猿害が出始めた。下流側では最近2-3年前からと上流側と比較して10年前後遅れて猿害が発生した。1970年代には白神山地の国有林でブナの大面積皆伐、針葉樹の植林が行われ、ニホンザルの下流域への移動に何らかの影響を与えた可能性があると思われる。

稲は収穫期に集中して食われるが、被害はとりたてて問題にするほど大きくはない。リンゴは冬の樹皮・芽・果台、秋のリンゴ、初冬の肩リンゴ、と年中被害が継続する。そのいづれもが被害量・被害金額として各農家の収入減をもたらし、経済的打撃を与えている。

稲・リンゴ共雪に耐える電柵を周囲に張りめぐらすことで、猿害を防ぐ事は出来るが、農業人口の過疎化と高齢化が田圃やリンゴ園の存続を危うくしていることに深刻な影響を与えている。

資料10

サル類における病理組織学的研究

（心臓病変を中心として）

野田亜矢子、酒井洋樹、柳井徳磨、柵木利昭
（岐阜大・農・獣医・家畜病理）

我々のこれまでの経験では、サル類においては比較的心筋線維症に遭遇することが多い。これらの経験をふまえて病死、あるいは実験殺したサル類のホルマリン固定標本について、定法に従いパラフィン切片作成後、ヘマトキシリン・エオジン染色、あるいはマッソントリクローム染色、ピクトリア青・ワンギーソン染色を施し光顕下にて観察した。

病変としては、最も多かったのは心筋の線維化病変であり、次いで心筋炎、心筋壊死が認められた。心筋において線維化の認められた症例では、病変の程度は血管周囲などに僅かに認められる、ごく軽度のものから、び漫性に認められる高度なものまで様々であった。このような病変は多くは成獣にみられ、高齢の個体も少なくなかった。また、特に高齢の個体では、壁内冠動脈枝において内膜肥厚が認められ、心筋梗塞の結果としての心筋線維化が強く疑われた。一方、心筋炎では広範囲に心筋間へのリンパ球浸潤や心筋壊死が認められる症例がニホンザルで数例あり、残存した心筋の核の巨大化、不整型化が認められた。病変の進んだものでは心筋線維への石灰の沈着や、あるいは線維化が進行しており、高度の心筋線維化が見られたものの中にも心筋炎の陳旧果が含まれている可能性が示唆された。

今回の検索では原因が不明だった心筋線維化病変がほとんどであったが、今後はヒトの特発性心筋線維症の原因の一つではないかとされる、ウイルス性の心筋炎などの検討も行っていきたいと考える。